

【はじめに】

モンサントとは何か？



「モンサントを調べてください。あのアメリカの多国籍企業の正体を暴かなければ。あの会社は、植物の種子に手を出しています。ようするに、世界中の食糧を独占するつもりなのです……」

二〇〇四年一二月のニューデリー空港で、ユドヴィル・シンは、私にこう伝えた。彼は、およそ二〇〇〇万のメンバーからなる北インドの農民組織「パラティヤ農民組合」のスポークスマンである。

私は、パンジャブ州とハリヤナ州を、彼と一緒に二週間かけて、歩き回ってきたところだった。この二つの州は、インド小麦のほとんどすべてが生産されている地域で、「緑の革命」のシンボルとされていた州であった。

調査の必要性

当時の私は、ドイツとフランスのテレビ局「アルテ（Arte）」からの依頼で、『テーマ』という夜の番組

で放映するために、二つのドキュメンタリーを制作している途中だった。その番組では、『自然へ忍びよる悪魔の手』というタイトルで、生物多様性の特集を組むことになっていた*。

一つめのドキュメンタリー『生物への海賊たち*』では、遺伝子組み換え技術の登場により、世界中で遺伝子の争奪戦が行なわれるに至った経緯を語った。バイオテクノロジーの巨大企業たちは、特許制度を悪用しながら、発展途上国の自然資源を遠慮なく横取りしている。たとえば、コロラドの大胆なある農業家は、メキシコで大昔から栽培されていた黄インゲンの特許を取得した。そして彼は、アメリカ大陸での「発見者」を名乗って、合衆国に黄インゲンを輸出しているメキシコの農民たちに、特許の使用料を要求している。また、モンサントというアメリカ企業は、あの有名な「チャパティ」（インドの無酵母パン）で使われているインド小麦の遺伝子特許を、ヨーロッパで取得した。

二つめのドキュメンタリー『小麦——予告された死の記録？』では、小麦の長い物語（人類が小麦の栽培をはじめた一万年前から遺伝子組み換え作物（GMO）が登場した現代まで）を通じて、生物多様性とその危機を歴史的に描き出した。ちなみに、このGMOの世界的リーダーが、モンサント社である。当時の私は、これらの作品のほかに、アルテの報道番組のために、もう一つのドキュメンタリーを制作していた。私は、そのドキュメンタリーに『アルゼンチン——餓えの大豆』というタイトルをつけ、牛肉と牛乳の産出国であるアルゼンチンに、遺伝子組み換え作物がもたらした悲惨な結果をまとめようとしていた。ところで、アルゼンチンでは全国の耕作面積の半分をGMOが覆っており、そこで起こっている問題のほとんどは、いわゆる「ラウンドアップ・レディ」という商品名の大豆に関連している。「ラウンドアップ・レディ」という名前は、除草剤「ラウンドアップ」に耐性をもつように、モンサント社によって遺伝子操作を施された大豆だからである。そして「ラウンドアップ」は、一九七〇年以降、世界でもっとも売れている除草剤で、その製造企業も、やはりモンサント社なのである*。

この三つのドキュメンタリーで私が検証したのは、それぞれ別の角度からではあるが、常に同一の問題

であった。はたしてバイオテクノロジーは、世界の農業に、また人類の食料生産に、いったいどのような影響を及ぼしているのだろうか？ それらのドキュメンタリーを撮るために、私は一年がかりで世界各地——ヨーロッパ、合衆国、カナダ、メキシコ、アルゼンチン、ブラジル、イスラエル、インド——を駆けまわったのだが、いたるところにモンサントという会社の影が忍び寄っていた。この会社は、あたかも世界規模で農業の新たな秩序を監視する「ビッグ・ブラザー」のように感じられ、そのことに私は胸騒ぎをおぼえていた。

冒頭で引用したユドヴィル・シンの言葉は、私がインドを出国する時に伝えられたアドバイスである。それまでの私は、まだ漠然と、モンサントという北米の多国籍企業の歴史——一九〇一年にミズーリ州セントルイスで創設され、二〇〇五年に世界一の種子販売企業となり、現在では世界中のGMOの九〇％を支配している——をもっと詳しく調べなければならぬ、と思っていたにすぎなかった。しかし、彼の言葉によって私の思いは明確になったのだ。

ニューデリーから戻るとすぐに、私はパソコンの電源を入れ、お気に入りの検索エンジンに「Monsanto (モンサント)」と打ち込んだ。すると、七〇〇万件以上の検索結果が表示された。その検索結果を眺めるかぎり、この会社のイメージは、とうてい清廉潔白とはいえないもので、産業界で最大の問題を引き起こしている企業としか思われなかった。実際、「Monsanto」に加えて「pollution (汚染／公害)」——英語でもフランス語でも同じように綴る——というキーワードで検索すると、三四万三〇〇〇件がヒットした。

▼アルテ…フランスとドイツが共同出資している公共教育テレビ局。この二国以外にも、カナダ、イタリア、ベルギー、オランダ、スイスなどで放送されている。一九九二年開局。

▼ビッグ・ブラザー…ジョージ・オーウェルの未来小説「一九八四年」に登場する独裁者の通称。

「criminal（犯罪）」——これは英語とスペイン語で同じ綴りである——も加えると、一六万五〇〇〇件。「corruption（買収）」にすると一二万九〇〇〇件。「 Monsanto falsified scientific data（モンサントは科学的データを捏造した）」と入力しても一一万五〇〇〇件がヒットする。

インターネットユーザーとして腕に自信があった私は、それから数週間にわたってネット検索に没頭した。サイトからサイトへとネット・サーフィンを繰り返して、膨大な未分類の資料やレポート、新聞記事を調べてまわった。私は調査をしながら、きわめて複雑なパズルのすべてのピースを忍耐強く一つ一つ組み立てているような感覚に陥った。そして、インターネットで調べたかぎり、この会社は嘘で塗り固められているように思われた。実際、モンサント社のホームページを開くと、この企業は「農業関連企業」を自称しており、その目的は「世界中の農業生産者たちが、より健全な食品を生産することを助け（……）自然環境に対する農業の影響を減らすことにある」と書かれている。しかし、ホームページに書かれていない事実がある。それは、農業に関心を向ける以前には、この企業が二〇世紀中もつとも巨大な化学企業の一つであり、とりわけプラスチックやポリエステルなどの化学繊維を主として生産していたことである。「私たちは何者なのか／会社の歴史」という見出しのページでは、数十年にわたってこの企業の主要商品だった猛烈な有毒物質について、ただの一言さえ触れられていない。その有毒物質とは、すなわちPCB（ポリ塩化ビフェニル）である。この物質は、かつて変圧器の絶縁体として使用された脂溶性化学物質で、合衆国では「アロクロール」、フランスでは「ピラレーヌ」、ドイツでは「クロフエン」という商品名で、ほぼ五〇年間にわたって販売された。モンサント社は、一九八〇年代に生産禁止になるまで、この物質の有害性を隠してきたのである。さらに、ダイオキシンを含む強力な除草剤である「2,4-D」がある。これは、ベトナム戦争でアメリカ軍が枯葉剤として使用した、オレンジ剤の主成分である。モンサント社は、この物質の有毒性を、科学データを捏造して巧みに否定した。また、「2,4-D」（オレンジ剤の別の主成分）、あるいは現在は使用禁止されている「DDT」（ジクロロジフェニルトリクロロエタン）も、モンサント社が

生産している。さらに、人体への有害性が指摘されている「アスパルテーム」(人工甘味料)も、乳牛や肉牛の成長促進ホルモン(人間や動物の健康に危険を及ぼす可能性があるため、ヨーロッパでは使用が禁止されている)も、モンサント社の商品なのだ。

激しい議論を引き起こした多くの製品が、モンサントの公式の歴史から、すっかり消えてしまっている(乳牛の成長促進ホルモンは例外。これについても、本書で取り上げる)。モンサント社の内部文書をよく調べれば、この企業の過去のいかがわしい歴史が、現在の活動にも影響を与えつづけていることがわかる。というのも、この会社は、次々と起こる訴訟にそなえて、つねに巨額の貯蓄を強いられているからである。

数億ヘクタールの農地に広がるGMO

こうして私は、アルテに新しいドキュメンタリーの制作を提案することになった。タイトルは『モンサントの不自然な食べもの』。本書は、その番組のために調査した内容にもとづいている。私は、この多国籍企業の歴史を語りたと思った。現在のモンサントの活動とその主張を、この会社の過去との関連から理解してみようと思ったのだ。一万七五〇〇人の従業員を抱え、二〇〇七年には七五億ドルの売上高をあ

▼一九八〇年代に生産禁止…PCBは、日本では「カネミ油症事件」(一九六八年発覚)の衝撃のため、欧米よりも早い一九七三年に禁止された。同事件は、PCBとダイオキシン(PCDF)の複合汚染。ダイオキシン類(広義)は、狭義のダイオキシン類(PCDD)、ダイベンゾフラン類(PCDF)、およびコブラナIPC B類に大別される(宮田秀明『ダイオキシン』岩波新書、一九九九年などを参照)。N.Y.U.には、不純物としてPCDDが含まれる。ベトナムでの枯葉剤やセブソ事件のダイオキシンはPCDD、カネミ油症のダイオキシンはPCDF、コブラナIPC Bである。

げ（うち一〇億ドルが純利益）、四六か国に進出しているこのアメリカ・セントルイスの企業は、どうやら「持続可能な開発」というスローガンに飛びついたらしい。つまり、モンサントが遺伝子組み換え作物の種子を商品として販売するのは、「持続可能な開発」を可能にするためであり、それは生態系の限界を広げ、人類に利益をもたらすことになると言っているのである。

一九九七年からモンサントは、「食物、健康、希望」という人々の心をつかみそうなスローガンを掲げて、多くの宣伝活動を行なった。そして、とくに遺伝子組み換えの大豆、トウモロコシ、綿花、菜種を、各国に広く売り込むことに成功した。二〇〇七年には、世界全体で遺伝子組み換え作物（そのうち九〇％は、モンサントが特許を所有している）の耕作面積は一億ヘクタールに及んでいる。その半分以上がアメリカ合衆国（五億四六〇〇万ヘクタール）、ついでアルゼンチン（二八〇〇万ヘクタール）、ブラジル（一一五〇万ヘクタール）、カナダ（六一〇万ヘクタール）、インド（三八〇万ヘクタール）、中国（三五〇万ヘクタール）、パラグアイ（二〇〇万ヘクタール）、南アフリカ（一四〇万ヘクタール）である。この「GMO耕作面積の拡大」^{*}は、スペインとルーマニアは例外として、ヨーロッパには及んでいない。世界全体で栽培されているGMOの七〇％が、モンサントの除草剤「ラウンドアップ」に耐性を持ち（モンサントはこの除草剤を「生分解性で、環境に優しい」と宣伝しているが、これはたまたま宣伝であり、後で触れるように二度も販売禁止の措置を受けている）、その三〇％が「Bt」という細菌由来の殺虫毒素をつくりだすように遺伝子操作された品種である。

この膨大な調査をはじめた時、もちろん私はこの多国籍企業の幹部たちに連絡を取り、一連のインタビューを申し込んだ。モンサントのセントルイス本社、ヤン・フィシェという人物に会うように私に伝えた。フィシェは農学者であり、リヨンにあるフランス支社の産業・組織事業部の部長である。二〇〇六年六月二〇日、私はフィシェとパリで会うことになった。彼が「長い期間にわたって」勤めたというリュクサンプール宮殿の元老院「^{スラタン}」のそばのホテルのことだ。彼は長い時間かけて私の話を聞いてくれ、

ミズーリ州の本社に私の質問を伝えてくれた。それから私は三か月待った。その間にもリヨンにいるフィシエにずっと問い合わせた。そのあげく、フィシエは私の要望が却下されたことを伝えてきた。そこで私は、セントルイスで撮影を行なった時に、この会社の広報担当責任者であるクリストファー・ホーナーという人物に電話をかけた。この電話で彼は、私のインタビュアーの申し込みは拒否すると話した。二〇〇六年一〇月九日のことだ。

「当社にインタビュアーをしたいという、あなたの強い気持ちは尊重します。しかし、社内会議を何度行なっても、当社の意見は変わりませんでした。あなたのドキュメンタリーに参加する理由はありません」

「私に質問されると、何かまじいことがあるのでしょうか？」

「いえ、あなたの質問に答えられるかどうか、という問題ではないのです。最終的にできあがった作品が、当社にとって正当なものと認められるかどうかの問題なのです。当社としては、あなたの作品は当社の利益にならないと考えているのです」

このような拒絶にもかかわらず、私はこの会社に口を開かせるために、ありとあらゆる努力を重ねた。この会社の代表者たちの発言内容を含んだ文書や映像資料を、私は可能なかぎり収集した。とりわけ、この会社がそれまでに公表した多くの文書に目を通した。それらの文書の中でモンサント社は、GMOが世界にもたらす利益について、こう述べている。「遺伝子組み換え作物を栽培する農業生産者は、それまで

▼『モンサントの不自然な食べもの』：原題「Le monde selon Monsanto」。フランスでは一五〇万人が視聴し、世界四二か国で上映・放映された。大きな反響を呼び、ヨーロッパ各国のGMO（遺伝子組み換え作物）政策に大きな影響を与えた。日本では、二〇〇八年にNHK-BBS「世界のドキュメンタリー」で「アグリビジネスの巨人——モンサントの世界戦略」というタイトルで放映され、さらに二〇一二年に、渋谷アックブリックをはじめ全国の映画館で一般公開され、現在、DVDが販売されている。

より農業を少ない量の散布で済ませることができるようになりました。また利益に關しても、従来の農業にくらべると、見違えるほど増加しています。このような文章は、たとえば二〇〇五年の『ブレッジ（誓約）』というパンフレットにも書かれている。これは、この多国籍企業が二〇〇〇年から定期的に発行している一種の倫理憲章であり、そこで彼らは自分たちの約束とその結果を提示している。^{*5}

ここで私自身について告白すると、私はフランスのポワトゥー＝シャラント地方の農家の娘として一九六〇年に生まれた。その当時から、すでに農業をとりまく状況は厳しくなる一方で、私はその変化を敏感に感じながら育った。そのように育った私は、モンサントの文書で述べられた内容が、ヨーロッパや他の国々で毎日生き延びるために戦っている農民たちに、どれほど大きな衝撃を与えるものなのか、容易に推測することができるとは思わなかった。私がこの本を書いたのは、なによりも大地の労働者である農民たちに向けてである。現在、グローバルゼーションの流れは、世界中の農民たちを貧困に落とし入れ、途方に暮れさせている。はたしてモンサントは、農民たちの生活を救ってくれる守護神なのだろうか。私は、その真実が知りたい。というのも、それは私たち全員の賭けなのだから。そして、いったい誰が人類の明日の食糧をつくるのか、それは私たち全員の問題なのだから。

「モンサント社は、世界各地の農業生産者たちをもっとたくさん作物をつくり、自立した生活をするためのお手伝いをします」と『ブレッジ』^{*6}に書かれている。さらに、こゝも書かれている。「よいお知らせがあります。私たちの調査によれば、遺伝子組み換え作物の生産は、伝統的農法や有機農法と共存できるだけではなくありません。こうした共存は、すでに世界各地に広がっています」^{*7}。最後に、とくに注意を引いた次の文章を紹介しよう。この文章はGMOについての重要な問い、つまり、人間の健康に対する予期せざる危険性について触れている。「世界中の消費者が、遺伝子組み換え作物が無害であることの、生きた証人です。二〇〇三年から二〇〇四年の間に、人々は合衆国の農業が生産した二八〇億ドル以上もの遺伝子組み換え作物を購入しています」^{*8}。この華々しい主張を検証するにあたって、私の念頭にあったのは、農

家がつくったものを食べている消費者のことであった。農業の進歩、いや、世界の進歩は、消費者の賢明な選択にかかっている。しかし、消費者には正しい情報が与えられなければならない。したがって私がこの本を書いたのは、消費者に向けてでもある。

モンサントの『ブレッジ』から引用したこれらの文章は、バイオテクノロジーの擁護派と反対派の中心的な論点に触れている。このセントルイスの会社は、擁護派からみれば、世界中の飢餓や環境汚染の問題を解決する製品を提案している企業であり、かつて化学企業だった時代の無責任な過去は、まったく取るに足らない問題ではない。ところで、モンサント社の活動のガイドラインとされている価値は、二〇〇五年発行の『ブレッジ』の声明によると、「誠実、透明性、対話、共有、尊重[※]」である。このような誓約は、反対派からすれば、単なる目くらましにすぎない。その誓約の背後には、世界の食品の安全性だけでなく地球の生態バランスさえも脅かすほどの、世界支配のための計画が隠されている。そして、モンサント社のうさん臭い歴史の歩みは、その計画に沿ったものと思われている。

両者の議論のどちらが正しいのだろうか？ このことを明らかにするために、次のような二つの方法で調査を行なった。まず、インターネットである。私は昼夜を問わず、インターネットから情報を収集した。実際、私がこの本で引用している資料の大多数は、インターネット上で入手可能なものである。それらの情報を探し、互いの関係を検討するだけで、かなり多くのことが理解できるので、読者にもぜひ試していただきたい。おそらく読者も、やりだせば夢中になるだろう。インターネット上ですべての情報が見つかるのだから、もはや「知らなかった」という理屈は（とりわけ法律を定める立場にいる人々には）通用しないだろう。しかし、もちろんインターネット上の調査だけで十分であるわけではない。そのため、私はふたたび巡礼の旅に出発した。合衆国に戻り、それからカナダ、メキシコ、パラグアイ、インド、ベトナム、フランス、ノルウェー、イタリア、英国を訪れた。その各地で、あらかじめインターネットで白羽の矢を立てた数十人の証言者にインタビューを行ない、モンサントの言葉と地上の現実とを照らし合わせた。

私が世界のあちこちで出会った多くの人たちが、警告を発していた。彼らの多くは、自分自身の生活や仕事に大きな困難が降りかかることも怖れず、モンサントの情報操作や虚偽、絶えずくり返される悲劇を告発していた。彼らが告発しているのは、本書で触れるように、モンサントの言い分が事実と食い違っているとような次元の話ではない。二〇〇四年、ユドヴィル・シンが私に言ったように、モンサントは現実には「植物の種子に手を出し」ており、「ようするに、世界中の食糧を独占しようとしている」。現在、この会社はある野望を実現しそうな勢いにある。ヨーロッパの農業生産者と消費者が、それに反対する決定を下し、世界の他の国々をそちらの方向へ引っ張っていかないかぎり。